

研究テーマ	自分なりのイメージを基に表現する力を育てる学習指導の工夫 第 6 学年「感じたままに花」の実践を通して
-------	--

石岡市立葦穂小学校 教諭 水尾 和江

I 研究テーマについて

児童のなかにはある表現に対して苦手意識をもったり、感じたことや考えたことを話すのを躊躇したりすることもしばしばある。高学年の児童は自分なりに納得のいく表現ができたり、作品を完成したりしたときは充実感を感じる。自分なりに納得のいく表現とは、児童がこれまでの学習で培われてきた自分のよさを生かすことにつながっていると考えられる。

自分の表したいことの主題を表すために様々な表し方を工夫することは、自分の納得のいく表現活動につながり、自分らしい表現にもつながっていく。それは、前学年までの造形活動の経験を生かして、いろいろな材料を選んだり、新しい用具を使ったりしながら、表し方などを工夫することでもある。

自分の感覚を通して形や色をとらえ、そこから生まれる自分なりのイメージを基に、思いのままに発想や構想をし、自分らしい表現活動をしていくことは、図画工作科の目標である「つくりだす喜びをあげよう」ことや「造形的な創造活動の基礎的な能力を培う」ことにもなり、ひいては「豊かな情操を養う」ことにもつながっていくものと考え、このテーマを設定した。

○ テーマに迫る手立て

自分なりのイメージを獲得するには、対象となる花をじっくり観察すること。その中から自分の感覚にぴったりあうものを見つけていくこと。また、多様な表現の中からこの表現好きだなと思えるものに出会うこと。その為にはやってみること、試すことが必要である。思いのままに線や形を描くことは、やがて自分なりの意味を見つけるようになり、自分の思いや願いを表すことにつながっていく。それは、自分の感じたことや思ったことを自分の方法で表すという表現につながる。児童はそのようにしながら、表したい思いを基に発想を広げたり、どのように表すかを考えたりする。それは次第にまとまりを見せるようになり、作品となる。児童が感じたこと、想像したことなどのイメージから、表したいことを見つけて、好きな形や色を選んだり、表し方を考えたりしながら、表現していく。

次の手立てを考えた。

1 共通体験としての表現方法の試行

遊び感覚も取り入れ、あまり制約をせずに体験させ、そのなかから自分のイメージがわいてくるのではないかと考えた。

2 児童と関わり

イメージを決定することに躊躇している子には話すことで、その子の考えを明確になっていくのではと考えた。

II 研究の実際

1 題材名 感じたままに花

2 目標 花からイメージを広げ、自分の感覚や活動を通して、形や色などの造形的な特徴を捉え、これをもとに自分のイメージを表現することができる。

3 題材について

(1) 児童の実態について (男5名 女7名 計12名)

男子3名はイラストをよく描いている。残りの2名も去年はイラストクラブの在籍していた。女子も描くことに抵抗をもつ子はあまりいない。しかし、自分は絵を描くのが苦手と感じている子も1名いる。また、見て描くことには苦手意識はないが、想像することには始めから否定的な男児が1名。2年生から昨年度まで複式学級として常に上学年の女子3名が一緒の学級で生活をしたため、手本とする上級生の存在もあった。

(2) 題材観

目の前の花を見て描くのではない。その花を自分がどう感じたか。どんなふうに思えたか。いわば、自分自身を見つめることになる。描画方法を試しながら、自分の感覚にぴったり合う方法を探し出す活動は、自分自身への肯定感をもつことにつながる題材である。不安定な1年間を過ごし、六年生となった子どもたちに自分のよさを感じてほしいと考え、この題材を設定した。

(3) 指導観

「花からイメージを広げる」「自分のイメージをもつ」と聞いても、児童は課題がとらえられないと予想し、まず始めに描画方法を探るためのお試しを設定した。試す活動を通して、自分が花に抱くイメージをとらえていくことができるのではないかと考えた。活動に入る前段階として、イメージに合う描画方法を探るため、コンテの使用、クレヨンと型紙を使ってのぼかし、紙に水を含ませたにじみなどを共通体験として位置づける。また、それぞれのよさに自信がもてるようが共通体験や作品づくりの時間の最後には、紹介をして讃えることで、目標に迫れるのではないと考えた。

4 題材の評価規準

関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
・ 花の形や色を自分なりにとらえ、絵に表すことを楽しもうとする。	・ 画面の組み立て方や配色をかきながら考えたり、試みたりできる。	・ 描画材料の扱い方を工夫し、その効果を確認しながら描くことができる。	・ 友達の作品を見て、そのよさや美しさ、おもしろさを感じ取ることができる。

5 指導と評価の計画 (7時間取り扱い)

○印は字数

時間	学習内容及び活動	評価規準
第一 次 ①	・ 様々な形や色の花の写真を見て、好きな花について話し合う。 ・ 花の作品を鑑賞して、感じたことを話し合う。	・ 写真を見ながら、自分の好きな花を探そうとしている。 <input checked="" type="checkbox"/> 【発表・行動観察】
第二	・ 絵の具、コンテなどの扱い方知り、試してみ	・ 多様な技法を試している。

次②	る。	【技】【試作品】
第三 次 ③	・自分が好きな形や色の花から感じたことをイメージをふくらませて思いのままに表現する。 ・経験した表現方法を活かし，工夫して表す。	・感じたこと表現している。 【発】・【技】【作品・行動観察】
第四 次①	・できあがった作品を相互に鑑賞する。	・友達に作品を見て，よさや表現の工夫に気づいている。 【鑑】 【鑑賞カード】

6 指導の実際

(1) 目標 自分が好きな形や色の花から感じたことをイメージをふくらませながら，表現することができる。

(2) 準備 新聞紙 コンテ ティッシュペーパー 画用紙 ドライヤー 花の写真 試作品
(児童) 絵の具 クレヨン

(3) 展開

学習内容及び活動	指導上の留意点 ◎評価
1 本時の学習課題を確認する。	・多様な技法を試した作品を鑑賞しながら，どんな技法が自分のイメージにぴったりかを考え，描く方法や色などをイメージさせる。
2 自分の描く花のイメージを絵に表す。 共通体験を元に作品をつくる。 ・コンテ ・クレヨンと型紙によるぼかし ・線描 ・ぼかし	・前時に描いた試作を元に描画方法を決めさせる。 なかなか始められない子には声をかけ，どのようにしたいのかを尋ね，会話をすることでイメージが明確になるようにする。 また，コンテを使用したぼかし，クレヨンと型紙を使つてのぼかし，紙に水を含ませたにじみなどを共通体験の試作を見せ，この中だけでなく，今までに学習してきた筆の強弱や色の重なり，絵の具の含ませる水の多少によっても感じが違うことを思い起こさせたり，やって見せたりしながら決定させる。 ・描画材料や道具など，困ったことに対応できるよう全体を観察する。 ・自分の花のイメージをとらえている子には，自信をもって作品づくりができるよう賞賛の言葉をかける。 ◎ 〈創造的な技能〉 自分が好きな形や色の花から感じたことをイメージをふくらませながら，表現できる。 (作品・行動観察)
3 本時のまとめをする。	・イメージをふくらませて描いた作品を紹介し，次時の意欲付けをする。

(4) 実際の作品

ア 試行しながら

クレヨンと型紙によるぼかしを試しながら、自分のイメージにあった形や色であることに気付いた男児は試した形を取り入れて作品に仕上げた。色の組み合わせや配置にも、この男児の激しさ、優しさが混ざり合っている存在している様子を呈している。同じ形の花をいくつも表し構成して美しさを表現している。



「フラワーパーティー」

イ 教師の称賛の言葉がけから



「笑うサボテン」

筆先を使って、細い線、太い線、直線や曲線を描く中で、この子なりの形が表れてきた。筆を使って面白い形ができたことを伝え称賛した。しかし、この子自身はどのような形、どのような表現方法するかは決まっていなかった。その後、作品づくりに入ると教師の称賛が心に残り、自分でもこれで行こうと決めたらしく、称賛した形が活かされていた。濃淡のある緑の本体にサボテンの花のような、あるいは顔のような花が誕生した。

ウ 課題の取り組み方は柔軟に

花の写真を見せた導入時に、この子は「思いを広げてイメージを膨らますことは苦手」であることを申し出た。花を見て描いても大丈夫であることを告げ、男児の思いを受け入れた。花を熱心に観察し、描く対象を決めると黙々と取り組む作品を始めた。提示した写真はどれも1種類ずつであったため、花の組み合わせやレイアウトは男児の思いが活かされている。課題によってはその子にあったものを受け入れる柔軟ながあっても良いのではないだろうか。



「桜の花びらと花たち」

エ 形や色から思いに、そして花に



「心の花」

始めは花の形や色に注目していたが、形や色から心を想像し、心の花々になっていった。楽しい時、悲しい時の思いを花になぞりながら、その形と色に反映していった。日頃穏やかに生活しているが、友達との会話や些細な出来事に嫌な思いを抱いたり、不安を覚えたりする場面もあるのである。そんな日々の自分を表現した作品であると見た。この児童の作品を通して一見穏やかに生活しているが、色々なことを受け入れている日々があることに気づかされた。

オ その子なりの表現方法で

共通体験は試行では行ったものの、作品には取り入れることはなく、今までに自分が体験した表現方法でイメージした花を描いた。絵の具の重なりやクレヨンの縁取りにこの子が日頃好んでいるポップな感じや力強さが表現されていた。



「花たちが踊り出す」

Ⅲ 研究の成果と課題

1 成果

しーんと静まりかえった教室。黙々と取り組む子どもたち。自分のすべきことが明確になり、自分のもてる力をフル活用して作品づくりに取り組んでいる時間。いつもいつもと心がけたいが、そうはいかない。この「思いのままに花」の題材は、自分自身を花に投影し、良い時間が持てた。そのことで、12人の子どもたちは誰もが自分らしい作品を作り上げることができた。この活動を通して、児童は教科目標である「感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わう」を実現できたように思う。また、イメージを基にした作品から児童理解にも大いに役だった。

今回の題材の実践の柱は次の3つと考えた。

試行

- いくつも試行することで自分のイメージにあった表現方法を選択することができた。
- 試作の活動を通して、花に対するイメージが明確になっていった。

表現方法の幅

- 写実的に描くことに抵抗がある子にとって活動に入りやすかった。
- 試行の表現方法だけではないことを知らせ、イメージをもつことに苦手意識を持つ子に安心して取り組ませることで、自分のイメージにあった表現方法を選択できた。

児童との関わり

- 製作過程の会話の中にイメージを具体化したり、決定したりする糸口があった。

2 課題

課題を以下の用にとらえた。

- 発達段階に応じた題材の設定。
- 方向性やイメージの決定には、製作途中の教師と会話のみならず児童同士の会話、鑑賞が、大きな手助けとなってくる。交流の時間を計画的に設け、イメージに近づくための材料や色、表現方法など、アドバイスをもらえる時間の設定。
- 材料や表現方法などは、教師サイドからの提示のみならず、児童の発想で試してみることのできる材料や時間の余裕。

参考文献

文部科学省 「小学校学習指導要領解説 図画工作編」 平成 20 年 8 月